



# 真紀子が反面教師に 「辻元清美」日本初の女性首相?

最近の永田町は女性のほうが圧倒的に元氣である。国会を歩いてみるとよくなる。カメラや記者団と追いかけてくる田中真紀子外相、着物姿もあてやかな扇千景・国土交通省（保守党首）、貫禄たつぷりの土井たか子・社民党首といった大物たちが、肩で風を切つて「そのけ、そのけ」とばかりに闊歩する。それに比べて男たちの貧弱なこと。すでに軍人は亡く、凡人集団が右に左にウロウロしている。ひとり、変人首相、小泉純一郎が気を吐いているが、その他の男どもは、情けないことにまったく存在感がない。先のシドニー五輪を見てもスポーツで国際標準に達しているのは、男ではなく女だったが、政治の世界も例外ならず、である。

## 「人」優「い」社民主義

そんな女性上位の永田町で、特に異彩を放っているのが、社民党政審会長を務める辻元清美である。「ピースボート主宰、関西弁でズケズケしゃべる生意気なイモ姉ちゃん」だった辻元もいまや土井社民党の事実上のナンバー2である。土井が引退すれば、若い辻元が中心になる。今や「土井私党」「ミニ女性党」

と化した社民党。野党第一党であったかつての社会党時代を含めると、たいへんな歴史と伝統を背負った由緒ある党でもあるのだが、そこに初めて四〇代女性党首が誕生することになる。

いまは、小泉改革旋風で「痛みを伴う政治」が大受けて、新保守主義にあらずんば政治家にあらず、との風潮が蔓延しているが、いずれ、欧州のようにその反動が来て、「人に優しい」社民主義が支持を取り戻す。鳩山・民主党にシン目が入れば、むしろ、辻元・社民党が新保守主義に対抗する二大政党の一つになる可能性がある。

政治記者や若手政治家の間で「日本の最初の女性首相は誰か?」という頭の体操をしてみると、意外やこの清美首相を予測する声が多い。二番手はもちろん真紀子首相。参院選後に小泉が改革に失敗し、しかも自民党を割ることができなかったときに、世論や自党内から真紀子首相待望論が出てくる、というのである。真紀子であれば小泉改革の継続性が担保できるし、自民党としても真紀子人気で衆院選を乗り切ろうとするという見方である。清美首相は、こういう筋書きだ。

「小泉が五年間かけて改革をやりまくる。歳出カット、自己責任の厳しいデフレ改革だから、その後にはペン草も生えてこない。そこで初めて英国のように社民政権への切り替わりのタイミングが生まれる。僕の趣味ではサッチャー型の真紀子より、肝っ玉母さんの清美の方がいい」(加藤派若手)

## 政治家としての資質

清美派の意見を総合すると、辻元の政治家としての資質は次の三点である。  
第一に、オルガナイザー(組織家)としての能力が極めて高い。早大教育学部在学中、民間国際交流団体「ピースボート」を設立、のべ二万人の若者を組織して六〇カ国以上を訪問、地球を五周もした。一九九五年の阪神大震災時にはボランティア・コーディネーターを務めた、というのだ。

確かに、何を考えているか分からない今の若い世代をとりまとめて、一つの方向に継続的に動かすのはなかなかの芸である。しかも、ピースボートであれば、その創業者、一種のベンチャービジネスと見れば、なかなかの起業家ともいえる。

第二に、弁が立つ。長い航海途中で身に付けたものか、「朝まで生テレビ」で鍛えられたせいも、論争上手である。相手の論点のウィークポイントをきちんと見分け、集中攻撃を仕掛けてくる。

日本では学校教育にも社会にも「討論」の土壌がないから、党首討論を見ていても、聞いているほうが恥ずかしくなるような代物が多いが、これからの政治には論争術は不可欠。国民に対し「痛み」を納得させるためにも、欧米、中国、アジアと言論で対等に渡り合うためにも、ちゃんとした議論のできない政治家は通用しなくなる。この意味でも、土井さんは早く引退して党首討論は辻元に任せたほうがいい。

第三に、これも単純な話なのだが、性格がいい。明るいのである。朝の連ドラ「ちゅらさん」ではないが、身についた大きな明るさは周辺を救う。多少の偽善が混じっていても、である。日本は「空気の国」である。みんな、明るい空気が好きなのである。だから辻元は好かれる。これもなかなか真似のできない、政治家として重要な資質である。

ちよつとほめすぎ、かもしれないが、二世、三世のお坊ちゃま議員だ



イラスト・松川勇

六年に近畿ブロック比例代表から立候補して当選した。しかし、ここからが辻元の真骨頂だ。土井人気に頼らず、次の選挙では選挙区から自分の力で当選しようと決意、後援会組織も支持団体もなかった土地にじわりじわりと辻元ファンを広げていって、二〇〇〇年総選挙では見事組織政党に競り勝った。

## 官僚をつまぐ使う

社民党では、政審副会長、幹事長代理、広報委員長を歴任、小政党だから予算委、憲法調査会、科学技術委員会、安全保障委員会、日米防衛協力のための指針に関する委員会に所属、財政経済、安全保障の勉強をしてきた。昨年は、世界経済フォーラム(ダボス会議)の「明日の世界のリーダー100人」に選ばれた。

ともかく行動力がある。「赤絨毯にはスニーカーが一番」と、国会内を走り回る。現場主義で、どんなところにも顔を出す。核武装・強姦発

言をした西村真悟・前防衛政務次官の更迭を求め、首相官邸に出没したり、政策協議で納得がいかないと、自民党要人宅を記者並みに夜回り攻勢をかけた。選挙区でも然り。東にタイオキシン問題あれば飛んでいき、西に核燃料工場の安全チェック問題あれば足は運ぶ。

このまま順当に育ってくれば有り難い。いい政治家になるだろう。ただし、注文が二つある。

一つは、外交、安全保障の勉強が足りない。政権を取るとなると、土井たか子の何でも反対ポリシーでは通用しない。空想的防衛論でも駄目である。国民の安全と財産を守るためにはどうするか、日米同盟をどう対等なものにしていくか、中国、朝鮮半島とどうつき合っていくのか、それを統治者の立場から考えなくてはならない。

次に官僚をつまぐ使うことである。いたずらに官僚たたきをしていても大きな仕事はできない。官僚をコマとして使いこなすのが政治家の醍醐味である。

いずれも真紀子が失敗したことである。この轍を踏まなければ清美首相の可能性はぐっと広がる。

(敬称略) V